

論文要旨

本論文の構成および内容の概要は次の通りである。

1) 構成

序 章

第1章 日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の対立

第2章 剣道の歴史論 —ルーツとしての武士道と花郎道—

第3章 剣道の文化論 —有効打突の概念と残心から—

第4章 剣道の技術論 —試合規則・審判規則からの派生—

第5章 剣道文化の未来志向

終 章

2) 内容の概要

研究の目的

現在、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO は、剣道文化のヘゲモニー（主導権）をめぐる宗主国争いを展開している。この宗主国争いは、「現代剣道をさらに発展させ、理論的にも競技力でも日本を凌駕する実力を備えていくことが、韓国剣道 KUMDO のなすべきことであり、真の宗主国の地位を取り戻すことである」という大韓剣道会専務理事の発言が引金となった。これに対し、全剣連（全日本剣道連盟）は、「我々が行っている剣道は、日本で育った歴史的背景をもつ剣道を指す」と応酬し、日本剣道 KENDO が正統という立場を表明した。このような状況を鑑みて、本研究では、まずこれまでの日韓剣道の双方の主張や対立を明らかにすることとした。

第1章で日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の対立と相違点を抽出した上で、歴史(第2章)、文化(第3章)、技術(第4章)について、それぞれの相克状況を詳細に検討した。さらにこれらの検討結果を踏まえ、第5章において日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の相克を超える未来志向の剣道文化を考察した。

本研究の方法論として、日本剣道 KENDO そのものを世界に発信し定着させようとする試みである「文化普遍主義的な方向性」と、国際的な広がりを持つ剣道の相互承認の試みである「文化相対主義的な方向性」の2つの方向性を対立軸に考察を進めた。

第1章 日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の対立

第1章では、第1節で剣道の宗主国論争、第2節で日韓の剣道小史、第3節で剣道界の国際的な動向、第4節で日本剣道 KENDO の文化変容への危惧を明らかにした。これらの視点から、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の数多くの対立と相違点が抽出されたが、結果的に、歴史論(第2章)、文化論(第3章)、技術論(第4章)の3つの論点を選び、日本と韓国双方の対立と相違点を詳述するものとした。

第2章 歴史論 —ルーツとしての武士道と花郎道—

日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の歴史とそこで派生した対立点を明らかにするために、日本剣道 KENDO は全剣連の示す『剣道の歴史』を基礎に、他方、韓国剣道 KUMDO は大韓剣道会の主張に従った。両国の剣道史については、まず「剣道 (KENDO / KUMDO)」という用語の出自に着目した。すなわち、

日本で「剣道」という用語が公式文書に登場するのは、1919年6月6日に大日本武徳会が制定した「剣道試合ニ関スル心得」に遡る。同年8月1日には「武術」とあるものをすべて「武道」に改める通知が出された。これより、剣術および撃剣は「剣道」に、柔術は柔道に、弓術は弓道に統一された。一方、韓国では既に1910年頃に「剣道」という用語を使用していたと主張されているが、論拠は示されていない。ただし、この主張に依る1910年は日韓併合が断行された年であることから、韓国における日本の植民地支配と前後して「剣道」という用語が使われたと推察された。また両国の剣道のルーツについて、日本では誇り高き武士の思想性を象徴する武士道を、韓国では新羅時代の武士であった花郎道を主張した。

第3章 文化論 —有効打突の概念と残心から—

剣道にみられる日本文化的特色として、有効打突の概念と有効打突の判定条件の1つである「残心」に焦点をあてて考察した。

剣道で「一本」とされる有効打突（ポイント）は、気剣体の一致した打突とその後の態度や動作を示す「残心」によって構成されている。この有効打突の判定には、準備局面、主局面、終局面の全過程を注視する形式主義と過程主義の様相が認められた。この点において、合理主義や結果主義に基づく多くの西洋スポーツとは異なる特性を有していた。

剣道の韓国への導入は、文化帝国主義の下で植民地支配とともに断行されたが、その結果として、日本剣道 KENDO の「残心（Zan-shin）」は、韓国剣道 KUMDO では「存心（Jon-shim）」に置き換わった。日本の歴史における武道や武士道精神は、時に偏狭なナショナリズムと結びつき、戦争やミリタリズムと親和的關係にあったため、韓国では、日本剣道 KENDO に対する抵抗感や嫌悪感が根強い。剣道の国際的普及を進める上では、こうした反日感情を鑑み、頑なに日本の伝統文化やナショナリズムを標榜するのではなく、剣道そのものに内在する普遍性に基づいて剣道文化を構築する必要性が示唆された。

第4章 技術論 —試合規則・審判規則からの派生—

現代剣道は競技化され、「試合」によって剣道技（技術）を競い合うことで成立している。そのために日韓の剣道技術の相違は、日韓双方の試合（競技）規則・審判規則に起因すると仮説を立て、両者の規則の比較検討を行った。

WKC（世界剣道選手権大会）では、FIK（国際剣道連盟）の『試合・審判規則』（以下、②国際版）に則り競技が実施される。しかし実際には、②国際版によって日韓国内で競技が実施されているのではなく、双方共に国内規則を定めている。すなわち、韓国には大韓剣道会の『剣道競技規則・審判規則』（以下、①韓国版）があり、日本には全剣連の『試合・審判規則』（以下、③日本版）がある。つまり、剣道競技には、日韓双方に国内規則と国際規則の3つが存在する。

『試合・審判規則』は、原則、③日本版が底本となっている。②国際版は、③日本版の英語翻訳付きである。2012年のWKCで適用された②国際版（2006年改訂）は、1995年の③日本版が底本であった。一方、①韓国版は、②国際版を韓国語にほぼ全訳しているが、打突部位の呼称や審判宣告など②国際版で使用されている日本語は全て排除され韓国語に置換されていた。また、剣道着、審判の服装、審判旗、反則行為など、特定の箇所について②国際版とは異なる記述が確認された。①韓国版は、大韓剣道会が自国用に独自にルール化を行い、日本剣道 KENDO 色を払拭するために様々な規則変更をしてきた。しかし、変更を加えれば加えるほど、国際規則である②国際版からも遊離していく状況が看取された。

第5章 剣道文化の未来志向

1) 文化普遍主義の限界

日本剣道 KENDO は、日本武道としての伝統文化性を矜持し、競技化を進めながらも文化普遍主義を貫いてきた。他方、韓国剣道 KUMDO は、日本文化色を排除する形で剣道をスポーツ化させ、韓国文化色を加味させてきた。その意味では、文化相対主義的に韓国剣道 KUMDO の中に韓民族の独自性を示そうとしてきたといえよう。文化相対主義的に自国の剣道を主張する大韓剣道会の国際化は、これまでの剣道の歴史を無と化した脱日本文化と民族主義を全面に出していた。そこで、日本剣道 KENDO の文化普遍主義を貫く全剣連は、「国際化」という用語ではなく、「国際的普及」を用いて国際展開を表現した。

しかし、本章における考察の結果、日本剣道 KENDO の文化普遍主義的な「国際的普及」には限界が認められた。なぜなら、文化は変化するものであり、普遍的には存在し得ないからである。韓国剣道 KUMDO と日本剣道 KENDO が対立的視点から歴史論と文化論を唱えても平行線をたどるだけである。文化対立は摩擦と軋轢を生じさせ、さらなる文化変容につながると結論づけた。

2) アマチュアリズムを堅持する日本剣道 KENDO

日本剣道 KENDO は、アマチュアリズムを堅持している。また、武道独自の身体運動文化の棄損、荒廃を懸念して、オリンピック競技への加入にも消極的である。スポーツが商業資本と結びつき、アマチュアリズムからプロフェッショナルリズムへ向かう国際スポーツ界の潮流に対し、全剣連は、日本剣道 KENDO が商業主義によって消費文化とならないよう堅持してきた。これに対し、韓国剣道 KUMDO は、韓国がテコンドーで成功したことによるオリンピック競技化と韓国武芸のプロ化をすすめる。韓国剣道 KUMDO は、剣道を国際スポーツに昇格させるために、剣道プロ化の意義とメリットを前面に打ち出し、オリンピック競技化を積極的に推進している。この方向性は、韓国国内あるいは国際的に広がる他のスポーツに対し、韓国剣道 KUMDO に対等な扱いを求めた結果でもあった。

3) ナショナリズムの対立と韓国新興武芸

国のためにスポーツを行うというスポーツ・ナショナリズムが、日韓共に歴史的に存在し、帝国主義下では国威発揚の道具として為政者に利用されてきた。特に、韓国では、日帝解放後もスポーツ・ナショナリズムを国威発揚と愛国心高揚の手段として活用してきた。韓国社会の「反日感情」は明確であり、民族主義と国家主義の両面性を持つナショナリズムを通して韓民族の団結を煽り、スポーツと連動させ政治的に利用してきた。そのため、韓国剣道 KUMDO も、韓民族独自の民族主義とスポーツ・ナショナリズムを鼓舞する象徴的存在となっている。剣道用語の韓国語への置換にもみられるように、日本剣道 KENDO そのものを韓国化して韓国剣道 KUMDO にするという新ナショナリズムを展開した。

さらに、韓国国内には日本剣道 KENDO との対立に留まらず、新たに大韓剣道会（韓国剣道 KUMDO）を脅かす剣道文化が誕生した。それが1980年代に真剣技法を用いて登場した海東剣道である。その結果、韓国国内では、新興武芸である海東剣道と伝統武芸である韓国剣道 KUMDO との間にも、覇権争いが生じるようになった。

結 論

日本文化に依拠し国際的普及として文化普遍主義を貫こうとする日本剣道 KENDO と、国際化を標榜し文化相対主義に訴える韓国剣道 KUMDO との相克が顕在化した。

日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO のナショナリズムを含めた文化ヘゲモニー対立を克服するため

に、嘉納と西田の思想を参照した。彼らの思想は、西洋文化（文明）に対する偏狭なナショナリズムでも、西欧諸国への対立や抵抗でもない「共存の精神」であった。また、日本精神主義でも日本文化至上論でもなく、そこには文明の衝突観もなかった。この「共存の精神」に基づけば、日本か韓国かといった民族主義や国家主義の対立ではなく、まさに「剣道精神の共存」を求めることになる。そのために、剣道の「普遍性」を問い、両国の歴史認識と相互の異文化理解を通じた未来志向的な剣道文化を展望する必要がある。

共存の思想を敷衍すれば、おそらく両国の歴史や文化、そして思想を止揚（Aufheben）することになる。この止揚によって得られるものは、日本剣道 KENDO でも韓国剣道 KUMDO でもない、特定の文化性を捨象した「剣道」であろう。この「剣道」を通じて互いの立場を理解し、対立を超えた議論を展開して、さらに高次の段階へと「剣道」を発展させることが可能となる。日本剣道 KENDO と韓国 KUMDO の相克を止揚することによって、「剣道」の普遍性を見出す叡智が、今、日韓双方に求められている。